

瑞雲山通玄寺曇華院

〔東洞院三条にあり、地名を初音杜と称す。原治承の頃は高倉宮以仁親王の殿舎なり、中

頃は足利左兵衛督直義殿館をこ、にかまへ給ふ。当院初は近衛河原にあり、寛正六年此地にうつす、季瓊日録に見へた

り〕開基智泉尼公〔四辻宮松岩寺の左府義成公の息女なり、それより代々姫宮尼公御持職し給ふ。禅宗尼寺、五山の其

一寺なり。本尊觀世音。毎年十一月廿五日諸人の参詣をゆるし給ふ〕

三銘鐘〔一鐘に三寺の銘あり。一ニ延福寺銘ニ曰、撰津国福原庄兵庫経島有レ寺名ニ延福寺ニ云云。于レ時延文丙申初冬下

旬五日。一ニ妙覺寺ノ銘ニ曰、平安城高辻大宮法華堂名ニ妙覺寺ニ云云、于時応永第八曆辛巳閏正月日。一ニ金龍寺銘ニ曰、

長亨二年戊申季春廿日從一位富子誌レ之金龍寺云云。○一説には、此鐘高砂尾上の鐘なりとぞ。又一説には、能因法師

が春の暮を詠じ山寺の鐘ともいふ。両説とも銘によりての諺ならんか、近年宮中より御寄附ありて新に一鐘を鑄させら

れ、これをつねに出し古鐘は宝庫に蔵め給ふ〕

不動堂

〔姉小路東洞院の東にあり、延命院と号す。本尊不動尊は伝教大師の作、三尺許。真言宗随心院に属す〕

業平卿家

〔高倉通三条坊門の南西側なり。今旧趾をとめて紫水軒と称す〕

ある人のもとより、在原業平朝臣の家の梅をつたへうへつぎたりと

て送りて侍りければ、よみてつかはしける

風雅集 世々へてもあかね色香は残りけり春やむかしの宿の梅がえ 前大僧正範憲

長明無名抄云 業平の中将の家は、三条の坊門よりは南、高倉たかくらよりは西に、たかくらおもてにちかくまで侍りき。柱

なども常にも似ずちまきばしらといふ物に侍けるを、いつ頃の人のしわざにか後にれいのはしらのやうにけづりなしてなん侍りし、なげしもみなまろにかどもかどもなくついぢもなく成て、誠に古代の所と見へ侍りき。中頃せいめい晴明がふうじけるとて、火にもやけずして久しく有けれど、世の末にはかひなく一とせの火に焼にき。

悪源あくげん太義たよし平ひらの旧蹟きゅうせき 〔高倉たかくら通三条の北、西側南の端にあり、東西二間許南北一間余の空地なり。初は高倉の方に竹

垣あり近來塀を囲む、此所説々区あり分明ならず〕

〔平治物語の大意、悪源太義平は左馬頭義朝の一男にして、忠肝ちゆうかん義膽ぎだんの人古今ここん無双むさうの勇将なり。十三才の時鎌倉かまくらにくだり、十九才にして都に上り、平清盛熊野詣くまのゆきの時、摂州安陪野あへべに出張して討滅さんと云しを、信頼のぶよりにさへられ本意をとげず、其後父義朝よしともの命をうけて飛驒ひだの国へ下りしが、勢のつく事限なし。然るに義朝長田をさだに討れ給ひければ、皆心がはりして只壹人になり、徒に死なんよりは親の敵清盛父子を討て耻辱を雪がんと、こゝかしこに忍び給ひけり。こゝに義平が家来に仕打六郎景澄かげすみといふ者、謀慮をめぐらし平家に隨身し、主の義平を下人とし、三条烏丸の家に隠し置けり。

かくて景澄が家のぬしが密にこれを見頭はして、六波羅へ訴人しければ、難波次郎経遠なんば つねとほ三百余騎にて討手に向ひしが、義平勇威を震ひ討手を切ぬけ、石山寺のほとりに隠れおはしける。終に難波三郎経房なんば つねふさに生捕られ、六条河原において斬られ給ふ。其後清盛布引灌詣きよもりぬのびきのたまきまうての時、義平の霊雷となつて経房を蹴殺し給ひけりと云云

○〔愚按、此物語を案ずるに、高倉たかくらよりは二町西なり。大内裏の御時は町条広くして、今の高倉は其時の烏丸からすまるにして、かの宿所の霊のとゞまる物ならんか〕

○〔こゝに天明四年の春、此地の支配を蒙る人、北の方の隣家を此空地に建続けんとして、即地主へ訴へ番匠にも此よしを命ず。然るに此空地にいつの頃よりか植置けん林檎の樹あり、根は三条の地域にありて枝葉空地に蓋覆せり。其年三四月の頃に何となく枯にけり、支配の人大に恠て、六月に至つて家建る事決して止めにけり。然るに此林檎の木七月頃より再生して芽を発し枝葉繁茂し、花は春の如く咲て九月に至り実を結びけり、人々現在の奇異なりとて驚懼せずといふ事なし、かやうなる地を発ときは験あり、其例和漢ともに多し、後世誠めずんばあるべからず〕